札幌市文化財調査報告書XXXI

S 270 遺 跡

1987

札 幌 市 教 育 委 員 会

札幌市文化財調査報告書 XXXI

S 270 遺 跡

例　言

1．本書は、札幌テクノパーク建設にともない昭和60年８月１日から９月20日にかけて実施したＳ270遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡の所在地は、札幌市白石区下野幌2004－１番地他である。

2．本遺跡の発掘調査は、札幌市教育委員会社会教育部文化課文化財保護係加藤邦雄が担当した。

3．本遺跡出土の石器石質の肉眼鑑定は、北海道開拓記念館研究職員赤松守雄氏にお願いした。

4．本遺跡の遺物整理、挿図作成、写真撮影は、下記の人々が従事した。

中川由美、今和博、平原豊、福井淳、波川静枝、竹内理恵、鈴木陽子

5．本遺跡の発掘調査、整理作業、報告書出版にあたっては、札幌市経済局エレクトロニクスセンター建設準備室、企画調整局団地課の協力を得た。

凡　例

1．第1図に使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「札幌東部（昭和55年12月)」、「野幌（昭和54年10月)」を複製使用したものである。

2．第3図に使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「札幌東部（昭和46年9月)」、「野幌（昭和47年6月)」を複製使用したものである。

3．図版のうち図版7は3分の1、図版8、9、10、11は2分の1の縮尺である。

4．石器実測図中の側縁の実線は、図で表現されにくい細かな使用痕状の剝離の範囲を示す。

目　次

第１章　調査に至る経過 …… 7
第２章　遺跡の位置と環境 …… 8
第３章　周辺の遺跡 …… 11
第４章　発掘調査の方法と層序 …… 17
第５章　出土遺物 …… 21
第６章　結　語 …… 31

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 9
第２図　遺跡附近地形図 …… 10
第３図　周辺の遺跡 …… 13
第４図　遺跡地形図及びグリッド配置図 …… 15
第５図　遺跡の層序(1) …… 18
第６図　遺跡の層序(2) …… 19
第７図　野幌丘陵の地質 …… 20
第８図　発掘区遺物出土数 …… 23
第９図　土器拓影図 …… 25
第10図　石器実測図(1) …… 26
第11図　石器実測図(2) …… 27
第12図　石器実測図(3) …… 28
第13図　石器実測図(4) …… 29

挿表目次

第1表　石器一覧表 …… 34

図版目次

図版1　遺跡空中写真 …… 39
図版2 A遺跡遠影（北から） …… 40
B遺跡遠影（西から） …… 40
図版3 A遺跡近影（南東から） …… 41
B遺跡近影（南東から） …… 41
図版4 A発掘状況 …… 42
B発掘状況 …… 42
図版5 A発掘区トレンチ …… 43
B発掘状況 …… 43
図版6 A発掘状況 …… 44
B発掘状況 …… 44
図版7　出土土器 …… 45
図版8　出土石器・フレーク …… 46
図版9　出土石器 …… 47
図版10　E－8区出土フレーク・チップ …… 48
図版11　出土石器 …… 49

第１章　調査に至る経過

札幌市は、近年の急速な情報化の進展等経済社会環境の変化のなかで、ソフトウェアハウス、システムハウス等都市型先端産業の育成と、地域産業の振興、市民生活の向上、国際交流等の幅広い役割を果す機能を有する基地として、エレクトロニクスセンター棟と、これを取りまく先端技術産業群を配した拠点であるテクノパークを建設することとなった。昭和59年冬に計画の推進局である経済局から、教育委員会に対してその候補地として選定された白石区下野幌2004－１番地他の埋蔵文化財包蔵地の有無についての問い合せがあった。

同地域内には、教育委員会の台帳に登載された埋蔵文化財包蔵地（Ｓ270）が存在することから、教育委員会としては、文化財保護法の趣旨を尊重し、計画区域から埋蔵文化財包蔵地を除外するか、またはそれが不可能な場合他に候補地を選定するなどして、その現状保存に努力してほしいとの申し入れを行った。

その後、経済局においては、教育委員会の要望をもとに種々の検討を加えたが、コンピューター関連産業の立地という環境面から考えると、ただ単に必要な土地の面積を確保すればこと足りるとすることのみでは解決し得ない事情から、当初予定した候補地の使用について再度協議が持たれた。

教育委員会としても、これらの事情を勘案し、とりあえず試掘調査を実施し、埋蔵文化財の性格、遺構、遺物の量などを明らかにしたうえで協議を行うこととした。融雪後の昭和60年５月２日の現地踏査の結果、黒曜石製の石器などが表面から採集されるところから、５月７日から９日の３日間にわたって試掘調査を実施した。その結果、開発予定地の約6000㎡にわたって遺物が分布すること、遺物の分布は、集落跡のように濃密ではなく、この附近一帯の野幌丘陵上に見られる陥し穴と思われるピットを主体とした遺跡か、あるいは、キャンプサイト的な性格であることが予想された。この結果をもとに再三にわたり協議を重ねたが、前述のような環境の面からの立地選定の困難性などの諸般の事情から、発掘調査を実施して記録保存とするもやむなしとの結論に達した。

発掘調査の実施は、すでに予定されている教育委員会の他の発掘調査と、工事着手の日程を調整のうえ、８月から９月にかけて実施することとした。

第２章　遺跡の位置と環境（第１、２図　図版１）

本遺跡は、札幌市白石区下野幌2004－１番地他に所在する。札幌市街から直線距離にして南西約12㎞の野幌森林公園に隣接して位置し、東へ約150ｍで江別市に、南へ約１㎞で広島町に至る。

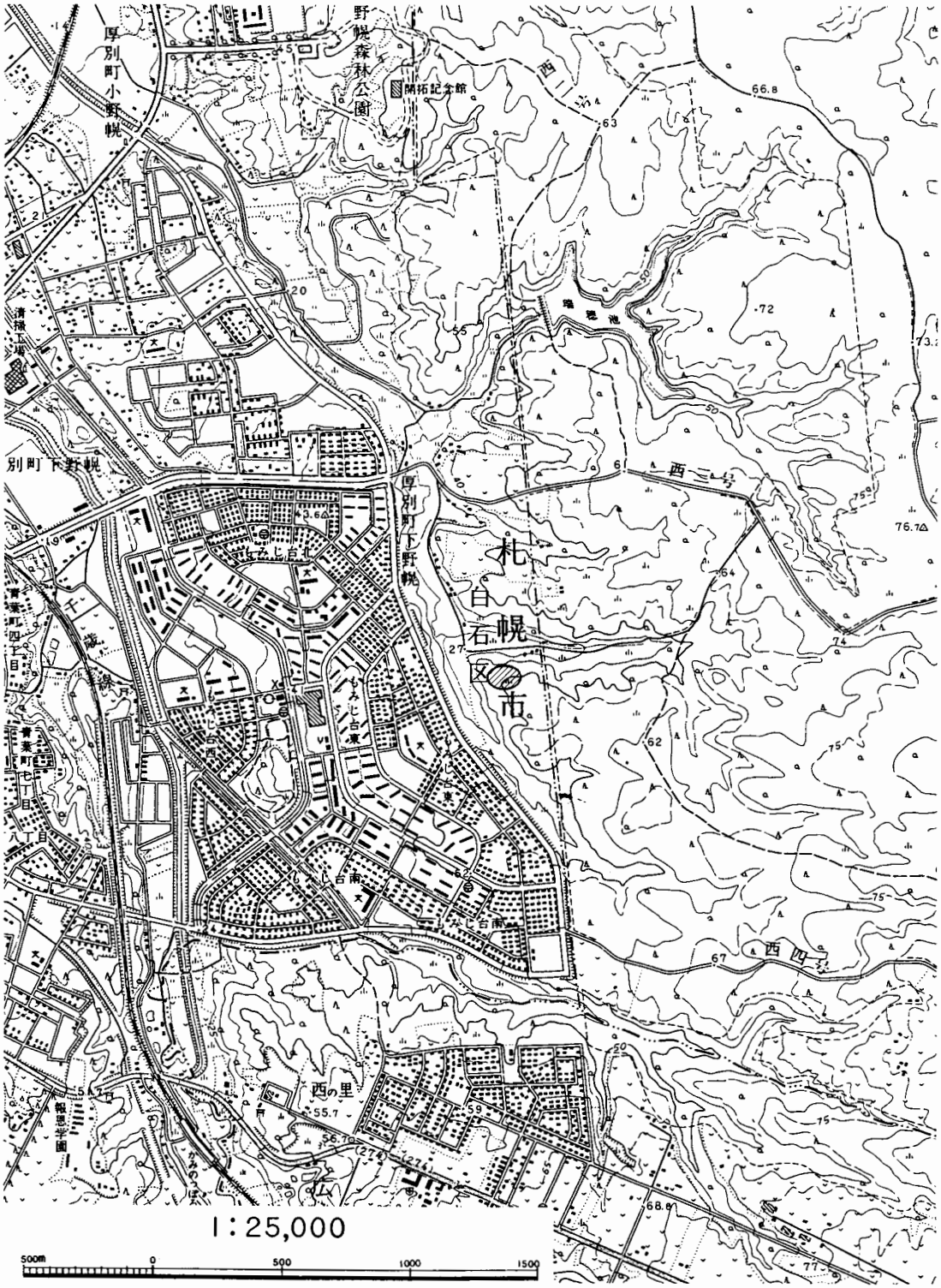
本遺跡を乗せる野幌丘陵は、江別市街に向って大きく北に突き出しており、東側は千歳川、西側は野津幌川、厚別川、北側を石狩川によって形成された沖積地にかこまれる。遺跡の所在する附近の野幌丘陵は、最も高い部分で標高約75ｍを計る。このあたり一帯は、浸食が激しかったと見え、いたる所に小支谷を形成する。

遺跡の存在地点も東側と北側を小野津幌川の原流ともいえる小河川により解析された台地上に位置する。このあたりを源とする小野津幌川は、下流約4.5㎞で野津幌川と合流する。遺跡を乗せる台地は、南東から、小野津幌川の合流点に向って北西に突出するような状態で見られる。遺跡は、この台地上の標高50ｍから47ｍの北西に向ってゆるく傾斜する面に存在する。

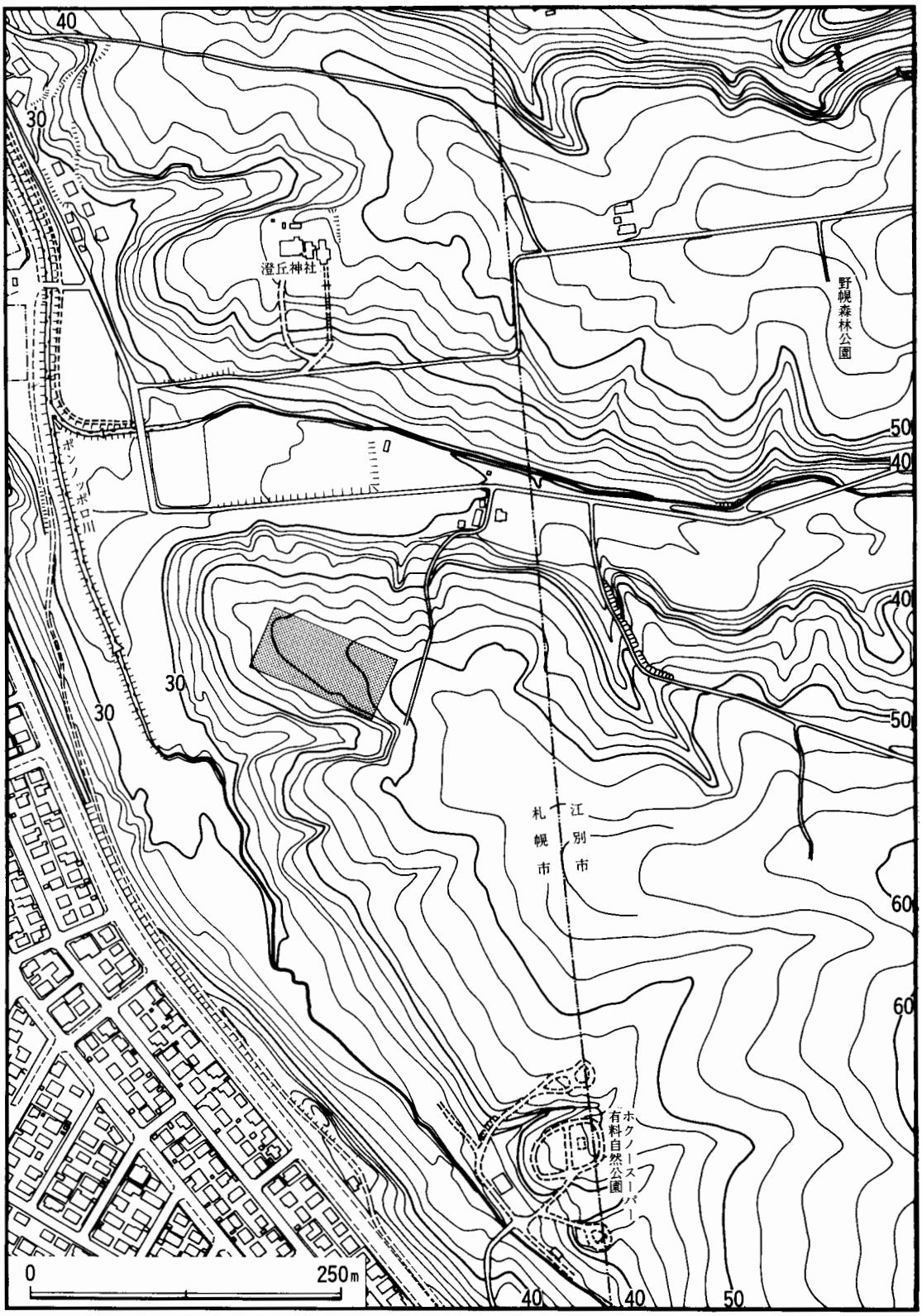
谷を隔てた北側の向側には澄丘神社が見られ、更にその北約2.5㎞には北海道開拓記念館が存在する。

本遺跡を乗せる台地上には、支笏軽石流堆積物が全く見られずに。小野幌層と呼ばれる層が見られる。この層は基底部に安山岩礫層を持つ。泥炭、泥炭質粘土がレンズ状に狭在する粘土、砂質粘土層を主体とした層である（赤松、山田他1981）。

この附近一帯には、後述のように遺跡がかなり多く存在しているが、いずれも黒曜石片、土器片を少量のみ出土する遺跡が多いことが大きな特色となっている。


厚別町小野幌
野幌森林公園
開拓記念館
西一号
66.8
63
72
清掃工場
別町下野幌
厚別町下野幌
西二号
76.7
札幌市
白石区
もみじ台北
もみじ台東
もみじ台西
もみじ台南
青葉町四丁目
青葉町七丁目
八丁目
西四号
西の里
55.7
56.7
68.8
1:25,000
500m
0
500
1000
1500

第1図　遺跡の位置


40
30
澄丘神社
野幌森林公園
ポンノッポロ川
50
40
40
30
30
50
札幌市
江別市
60
60
ホクノースーパー
有料自然公園
0
250m
40
40
50

第２図　遺跡附近地形図

第３章　周辺の遺跡

本遺跡の周辺地域では、すでに幾つかの遺跡の発掘調査が実施されている（第３図）。本遺跡のやや特殊な遺物の発見の理解のために、現在までに調査の実施されている遺跡の概要について記す。

１．Ｓ153遺跡（加藤編1976、上野・羽賀他1976）昭和47年春に工事中に発見され、札幌市が埋蔵文化財保護体制を制備する契機ともなった遺跡の一つである。

昭和48・49年度の発掘調査によっては、谷を取りかこむ状態で、縄文時代早期、中期、晩期、続縄文時代の遺物と墓壙698個、陥し穴31個、擦文時代土器片数点を発見した。

昭和56年度の調査では、48・49年度発掘地点の北西を発掘。縄文時代中期竪穴住居跡１軒、続縄文時代土壙１個、時期不明土壙４個、陥し穴２個、縄文時代早期土器片数点を発掘。

２、Ｓ273遺跡（羽賀1976）

縄文時代早期　土器、石器、焼土

３、Ｓ242遺跡（直井1975）

縄文時代早期、中期土器、石器、陥し穴２個

４、Ｓ247遺跡（松岡1975、昭和58年札幌市教委試掘）出土遺物なし

５、Ｓ304遺跡（松岡1975）

時代不詳土器片７点

６、Ｓ305遺跡（松岡1975）

チップ１点

７、Ｓ306遺跡（松岡1975）

出土遺物なし

８、Ｓ451遺跡（松岡1975）

チップ、フレーク多数、風化した土器片

９、Ｓ248遺跡（昭和58年札幌市教委試掘）

黒曜石チップ、削平により壊滅

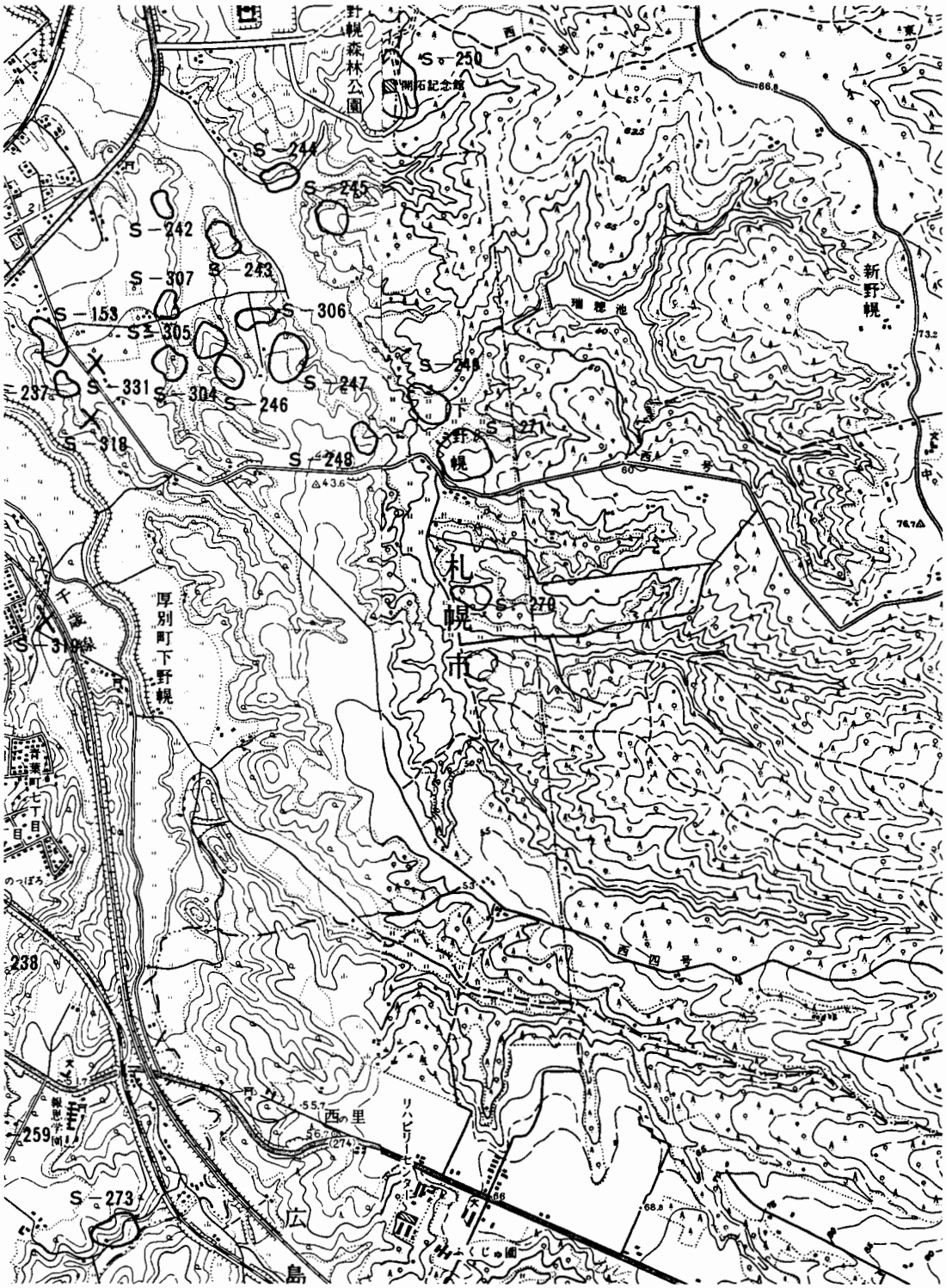
10、Ｓ271遺跡（昭和54年札幌市教委試掘）

黒曜石チップ・フレーク数点

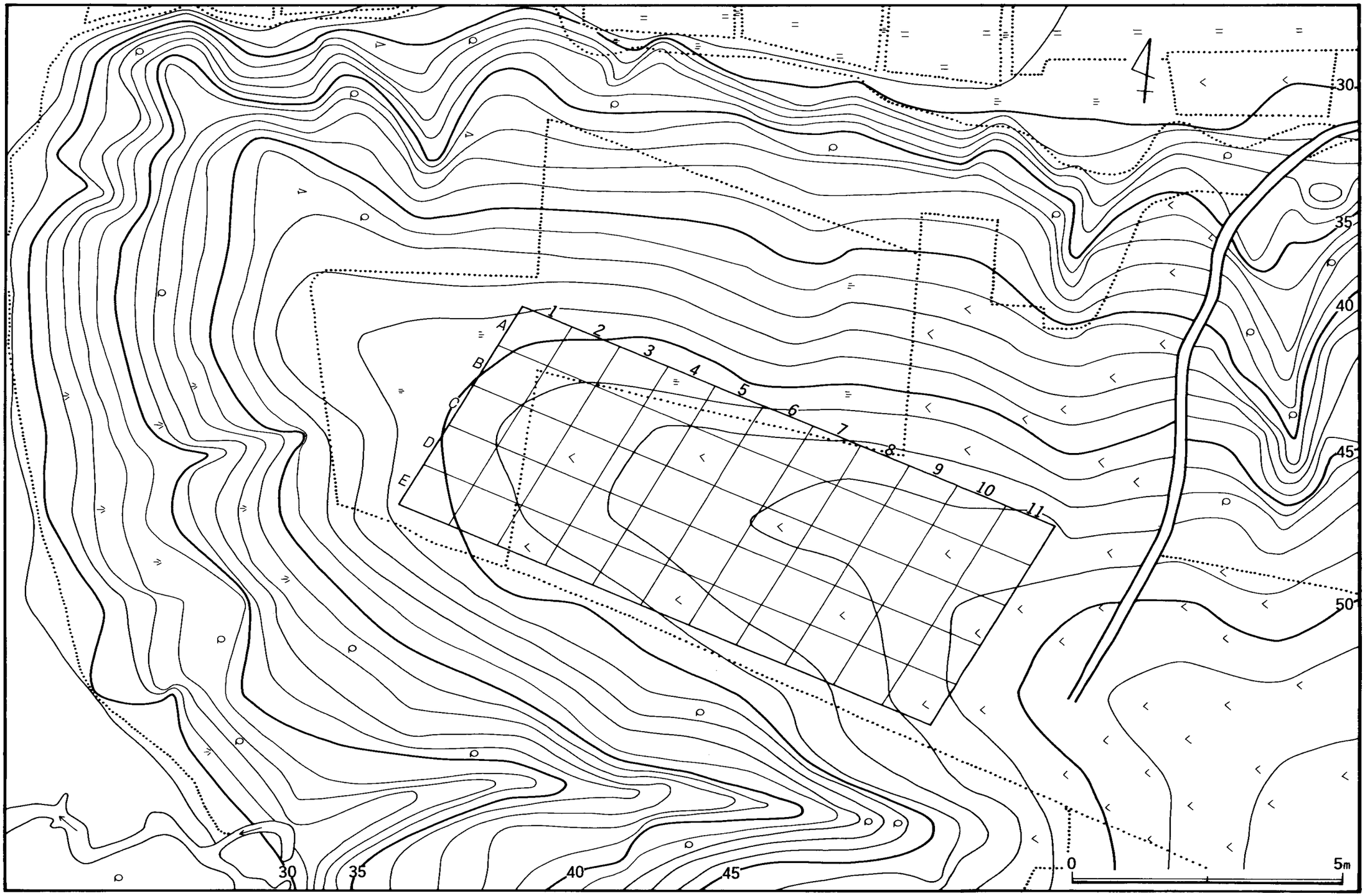
以上のように見ると、本地域一帯の遺跡群のなかでは、縄文時代前期、後期を除く各時期の墓壙と考えられるピット群多数と中期の竪穴住居跡１軒、陥し穴33個を発見したＳ153遺跡と、早期と中期の遺物及び陥し穴２個を発見したＳ242遺跡、早期の遺物と焼土が発見されたＳ237遺跡の３遺跡を除いては、いずれもが少量の土器片、黒曜石のチップ、フレークなどが発見されるに過ぎない。前述の試掘調査の結果では、遺物が全く発見されなかった例も見られるが、昭和48年度に札幌市教委が実施したこの地の分布調査は、畑地を含めすべての地区を多人数で、くまなく踏査する方

法を用いており、表土層が浅く過去に耕作の行われていたこの地域では、ある意味では試掘調査以上の精度の高さを有するものであるといえる。それにもかかわらず試掘調査で極めて少量の遺物しか発見されないという事実は、多くの遺跡が極めて限定された範囲内に極微量の遺物しか存在しない遺跡が多いということを如実に物語っている。

これらの遺物群の分布する南側には、すでに大規模な団地が造成されているが、昭和46年以前にこの団地の造成にあたって、一応遺跡の分布調査が行われているようである。その当時の分布調査でも、積極的に発掘調査を必要とすると判断される遺跡が存在しなかったようである。この事実から推測すれば小野津幌川と野津幌川にはさまれる地域には、野津幌川に面するＳ153遺跡、Ｓ237遺跡と、台地の北側に面して見られるＳ242遺跡以外には、日常生活空間として使用された遺跡が営なまれることがなかったと見ることが可能である。更に、Ｓ153遺跡に見られる縄文時代前期、後期を除く続縄文時代に至る時期の墓壙を構築した人々の居住地は、縄文時代早期、中期を除いては、いずれもがこの両河川を越えた地域にあったと見ることが可能である。


野幌森林公園
明石記念館
S－250
S－244
S－245
S－242
S－243
S－307
S－153
S－305
S－306
S－331
S－304
S－246
S－247
S－248
S－271
S－270
S－318
S－273
237
238
259
西三号
西四号
新野幌
厚別町下野幌
札幌市
西の里
リハビリセンター
広島

第３図　周辺の遺跡



第４図　遺跡地形図及びグリッド配置図

第４章　発掘調査の方法と層序

１　発掘調査の方法（第４図）

本遺跡を乗せる台地は、前述のように北側に東西に流れる小河川と、西側に略南北に流れる小河川の合流点に突き出るような状態で位置する。遺跡は、この台地上の南東から北西にかけて、ゆるやかに傾斜を見せる部分に存在する。

発掘は、台地上の長軸線を基線とし、長軸100ｍ、短軸50ｍとし、１辺10ｍのグリッドを設定した。長軸側の呼称を１～10、短軸側をＡ～Ｅとした。

発掘調査にあたっては、10ｍのグリッドのうち、西側と北側に土層観察用のブリッジを残し、９×９ｍの範囲を発掘した。

２　層序（第５、６、７図）

本遺跡の基本的な層序は、次に示すとおりである。

第Ⅰ層：茶褐色粘質土（耕作土）

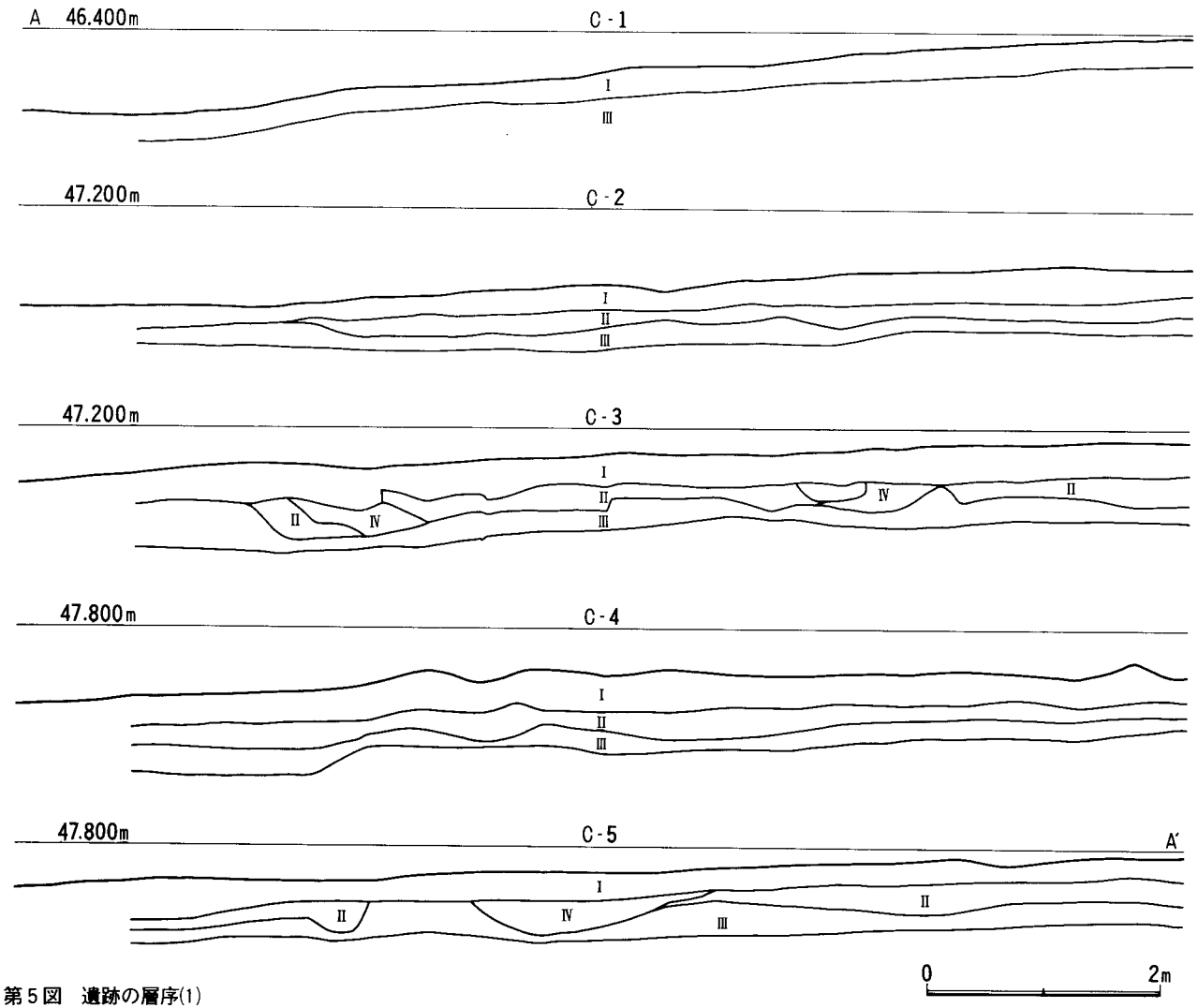
第Ⅱ層：黄褐色粘質土

第Ⅲ層：乳白色粘質土

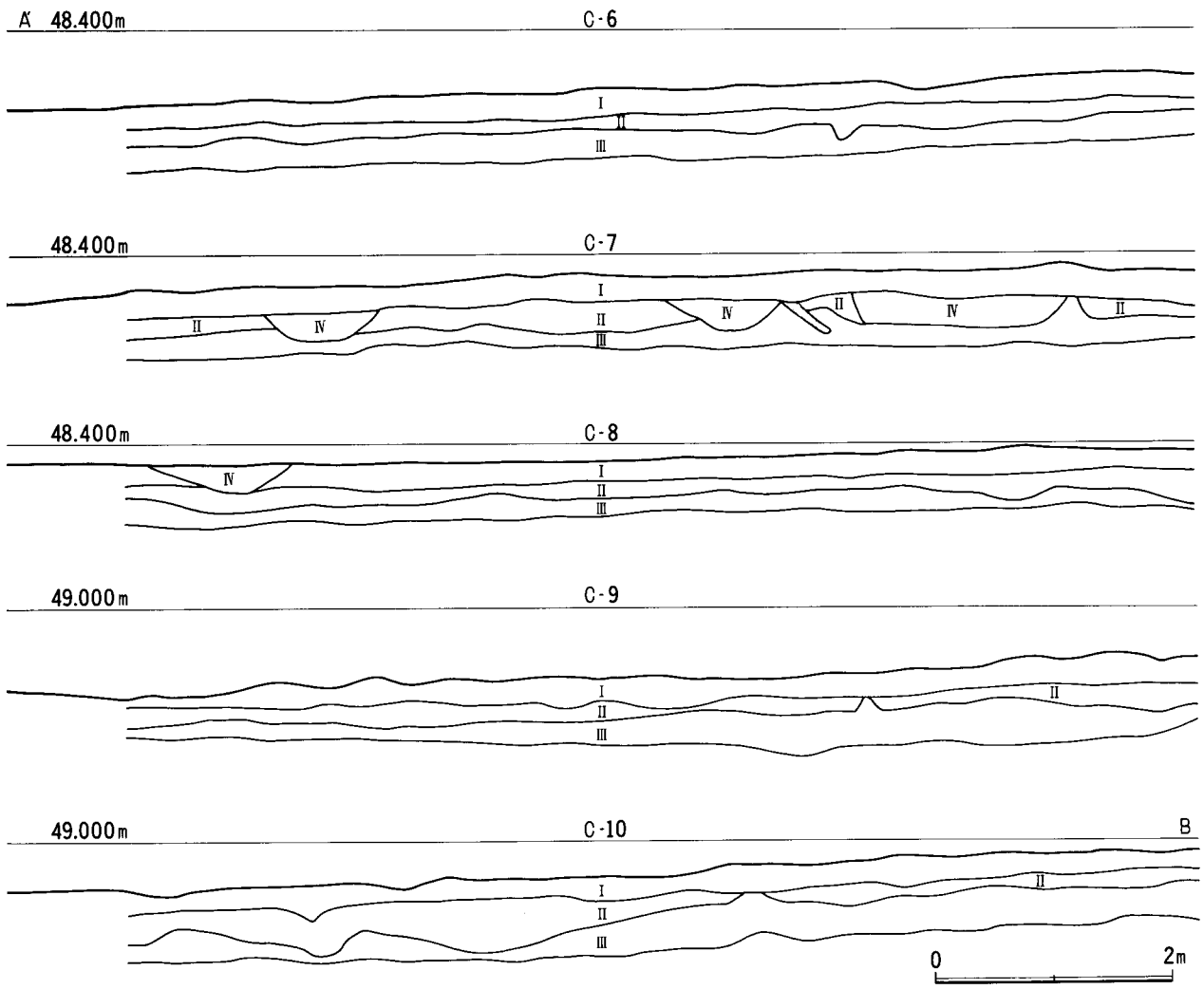
第Ⅳ層：木の根による攪乱

第Ⅰ層は、開墾以来現在に至るまで常時耕作がくり返された土である。乾燥すると、堅くなり、人が歩いた畑の畝ではスコップが立たなくなる程である。第Ⅱ層は、乾燥するとクラックが入る。この層のところどころに風倒木痕や木の根の掘り跡が見られる。第Ⅲ層は、粘土であり、深いトレンチを入れた所、部分的に砂礫層が見られる。

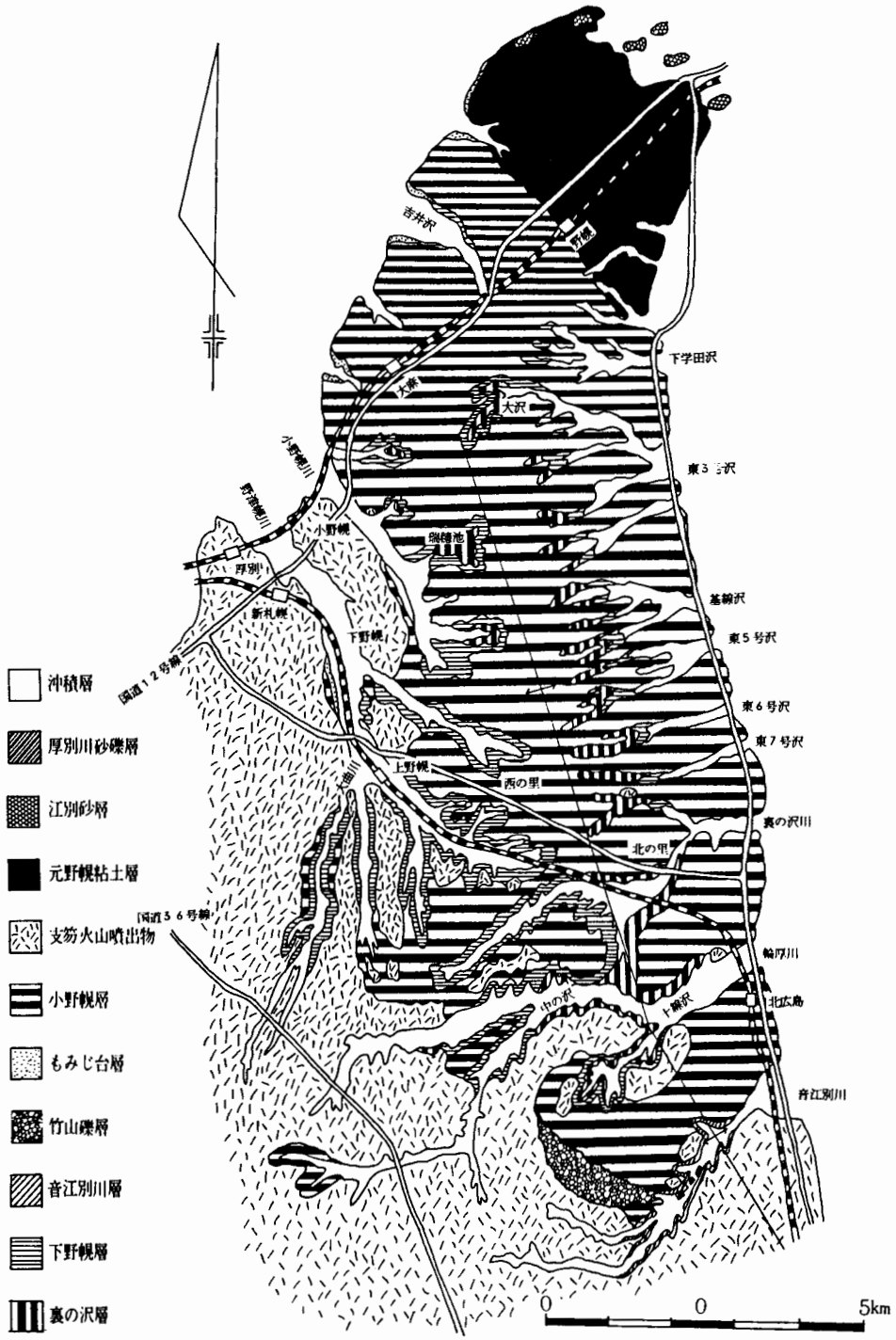
本地域で特徴的なことは、厚別、清田地区に特徴的に見られる支笏軽石流堆積物が全く見られない点にある。第７図によれば小野幌流より西側の地域では支笏軽石流堆積物の存在が一般的であり、これより東側では見られなくなるようである。


A 46.400m
C-1
I
III
47.200m
C-2
I
II
III
47.200m
C-3
I
II
III
IV
II
IV
II
47.800m
C-4
I
II
III
47.800m
C-5
A′
I
II
IV
III
II
0
2m

第5図　遺跡の層序(1)


A′ 48.400m
C-6
I
II
III
48.400m
C-7
I
II
IV
II
III
IV
II
IV
II
48.400m
C-8
IV
I
II
III
49.000m
C-9
I
II
III
II
49.000m
C-10
B
I
II
III
II
0
2m

第6図　遺跡の層序(2)



第7図　野幌丘陵の地質（赤松・山田他1981より）

第５章　出土遺物

本遺跡の発掘調査により発見した遺物の総量は、第８図に示したように、それ程多いものではない。

本遺跡の出土遺物総体では、土器といわゆる定型的な礫石器、剝片石器が極めて少量であるのに対し、一部に調整痕あるいは使用痕の見られる剝片が多く、更に多量の黒曜石のフレーク・チップが集中して見られる地区が存在することである。

Ｅ－９区では、約9,541個のフレーク・チップが石鏃３個、台石１個などとともに集中しており、Ｂ－９区、Ｃ－８区を中心とする地区では、やはり多量のフレーク・チップとともに同一個体の土器片23個、石槍２点、石斧、砥石などが出土している。この他では、Ｅ－10区、Ｃ－５、６区などにも、フレーク・チップなどが集中して見られる。

以下に、それらの出土遺物の概要について記す。

Ａ　土器（第９図、図版７）

出土土器のすべては、磨滅が著しく、文様が確実に判明するものは数点にしかすぎない。また、胎土、焼成などから最大３個体を越えない土器の破片であると思われる。

１～３は、Ｃ－５区から発見されたもので、同一個体の破片である。１は、口縁部破片である。やや内側に削いだ平坦な口唇で、口縁部には、２段の肥厚帯が見られる。下の肥帯の直下には、外側からの貫通孔がめぐる。竹管状の工具の内側を利用した刺突文が口唇から貫通孔にかけ斜行する。２は、２条の横走する貼付帯をめぐらす大型破片であるが、磨滅が著しく一部に縄文が認められるのみである。３も同一個体であり比較的文様が明瞭である。これによれば地文は羽状縄文であり、地文を施文した後に貼付帯を施文している。４～26は、Ｂ－９区から発見されたもので胎土、焼成から同一個体であると思われる。４、５は、口縁部の破片である。口唇には、地文の縄文を施文後に貼付帯を横走させ、更に、その下部にも貼付帯が見られる。この部分については、地文を施文後の貼付であるか、あるいは、成形時に貼付したものであるか不明瞭である。この下部に外側からの刺突文（いわゆる突瘤文）が見られる。１の土器と同様な文様構成を有しているが、口唇の形態、口縁部の貼付帯の状態、竹管による刺突が見られないことから、異なる個体の土器であろう。６～９は、横走する貼付帯の見られるもので、地文としての羽状縄文を施文した後に貼付される。貼付帯の位置は、地文の縄文の羽状となる部分とその中間に位置し、貼付帯上にも縄文が施文される。12～26は、表裏の磨滅が著しく、13、14、16、17にかろうじて縄文が認められるのみである。27、29、30、32は、Ｅ－５区から出土したものであり、縄文のみが見られる。胎土、焼成は１～３に近い。28は、Ｃ－６区、31はＢ－６区から出土したものである。

Ｂ　石器（第10、11、12、13図、図版８、９、10、11）

１、２は石鏃。１は試堀により出土したもので両面調整で、柄部を欠失している。２は、Ｅ－

８区のフレーク・チップの集中地点出土のもので、柄部の先と尖頭部を欠失している。両面ともに両側から入念に調整を行っている。３～５は石鋸先である。３はＢ－８区出土で、両面調整が行われる。４、５は、ともにＥ－８区出土で柄部を残し、他を欠失している。６、７は石槍、またはナイフ状石器で、ともにＢ－９区から出土した。６は、ほぼ左右対称で断面三角形を呈し、両側からの入念な調整が加えられる。裏面の柄部は肉眼でも明瞭に識別が可能な程磨滅し、更に長軸にやや斜行する状態で擦痕が認められる。明らかに着柄された痕跡であろう。７は、片面の一部に表皮を残し、雑な調整が行われ、その裏面も一次剥離面を多く残す。

８～11は削器として分類されるもの。８は両側縁に大きく調整を加え刃部とし、裏面はバルブの部分に調整を加えている。９は試掘調査時に発見したもので、左側縁の一部に調整を加えている。裏面は一次剥離面のままである。10もやはり右側縁に調整が加えられる。11は、Ｂ－２区出土で両側縁に調整を加え刃部とし、下端は、一部欠失するが残存部には、使用によると思われる痕跡が見られる。

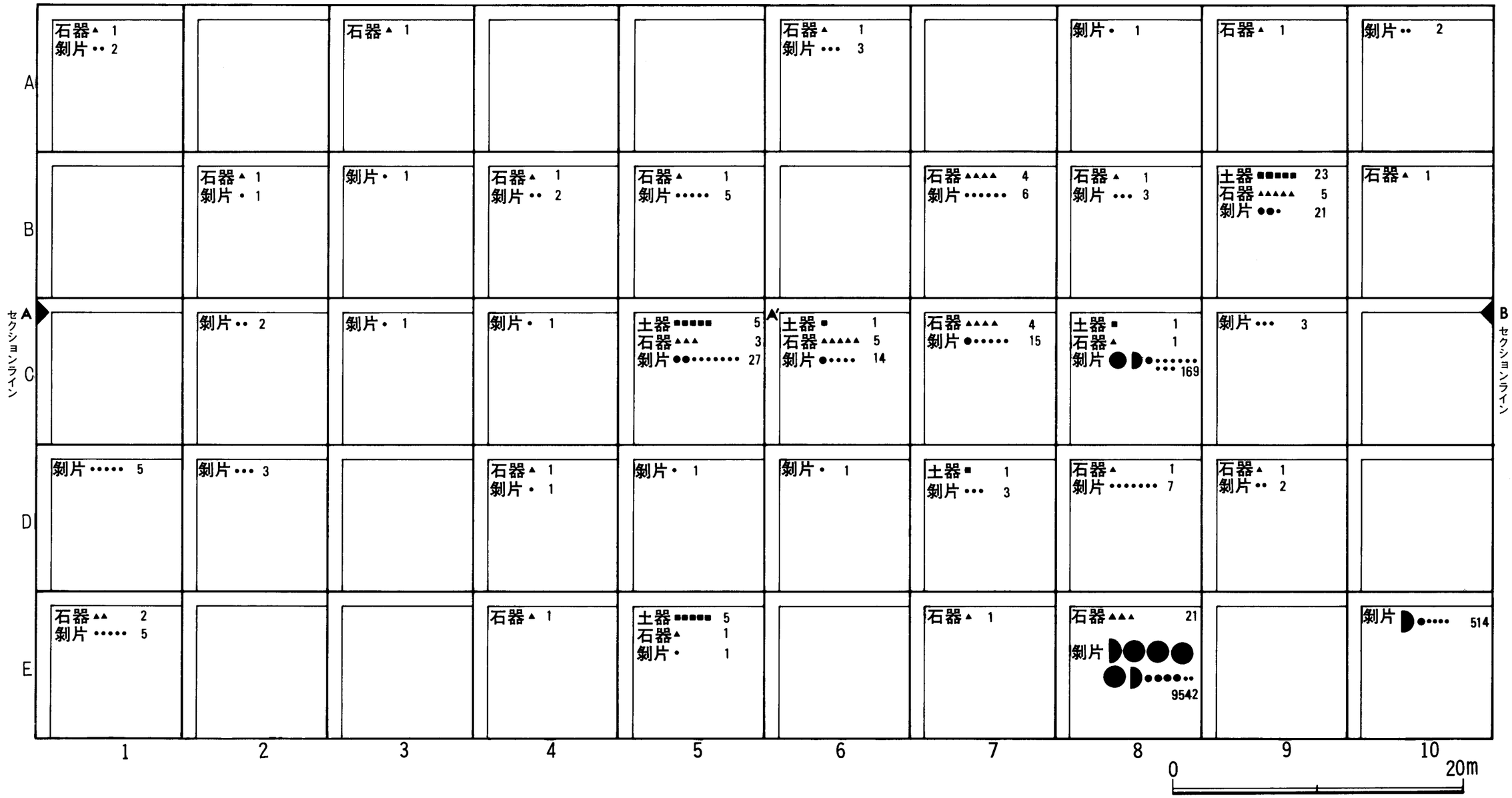
13～46、53は、剥片の一部に使用によると見られる細かな刃コボレ状の剥離の見られるものである。実測図の側縁に実線で表わした部分である。特徴的なもののみについて簡単に説明を加える。13、15は、原石から剥離したままの縦長剥片を使用している。ともに片面に大きく表皮を残している。14は、右側縁の使用が著しく、磨滅した状態である。17も左側縁が磨滅している。18は、台形の剥片の右側一部に調整と思われる剥離が加えられている。19は、右側の角度の高い剥離面の部分に使用痕が見られ、あたかも掻器の如く状態となる。20は、不定型剥片の両側縁を使用している。

21は、大形剥片の両側縁に磨滅が見られる。23、24は、ノッチ状に使用痕が見られ、25は、一次剥離面側の左側が著しく磨滅している。22、26～37は、縦長の小形剥片の一部に使用痕の見られるものである。いずれの磨滅部も小さく湾曲するものが多く、比較的細い棒状の工具の細工に使用されたものであることがうかがわれる。38～41は、小形でやや幅広の剥片を使用している。42～45、53は、剥片の１端の背の高い剥離面に使用痕が認められ、エンド・スクレイパー状に使用されている。43～45は残核の再利用品かと思われる。46も同様で残核状剥片の一部に使用が認められる。

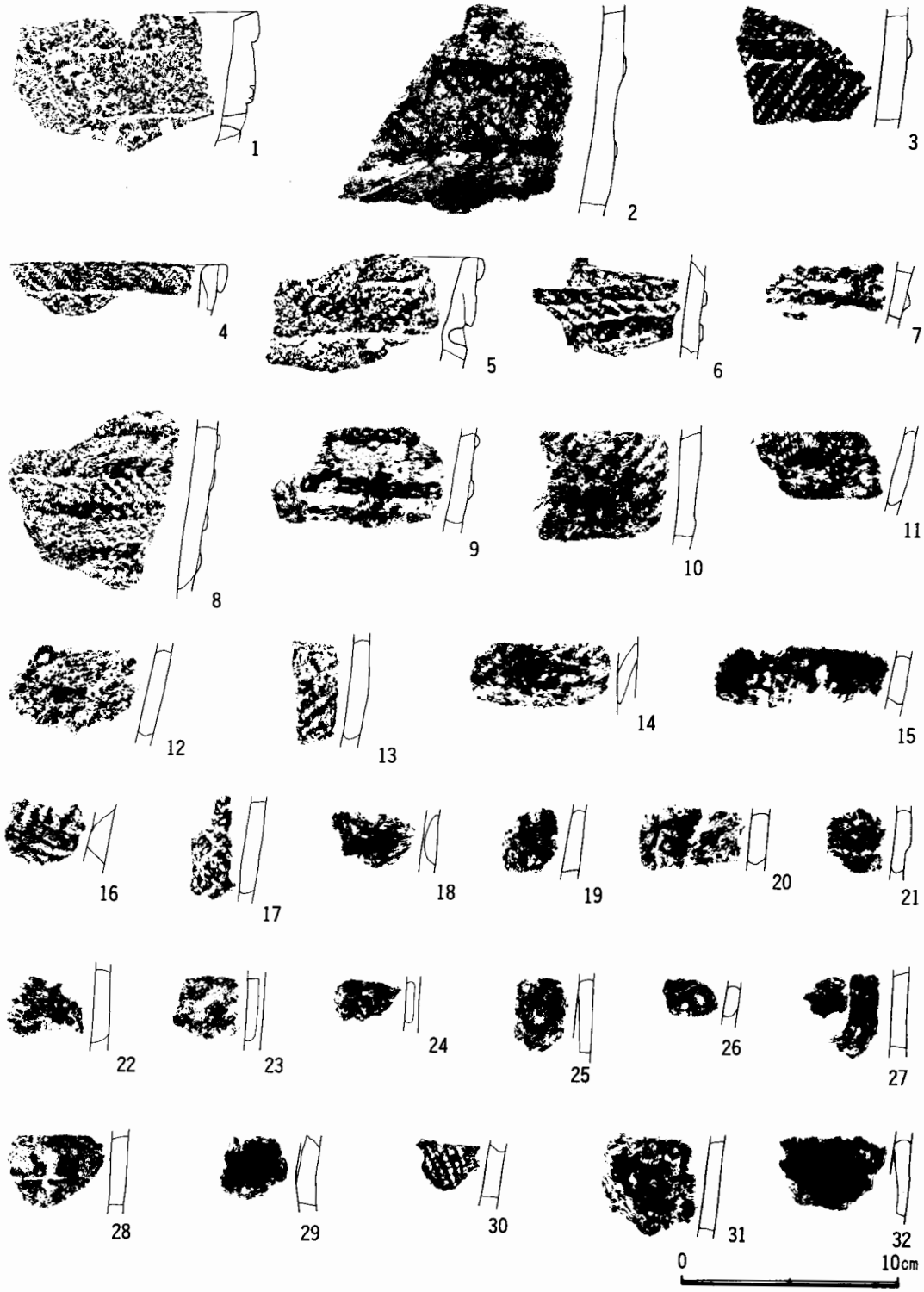
12、47～52、54～66は剥片である。47、48は比較的大形であり、12、49～52、54～61は縦長、62～66は、やや横走の剥片である。前述の使用痕のある剥片に比較しても、形態的に形の整っているものが多く見られるが、使用による磨滅は全く見ることができない。前述の使用痕の見られる剥片は、比較的Ｅ－８区に多く認められ、使用痕の認められないこれらの剥片は、他のグリッド出土例がほとんどである。形態が整っているにもかかわらず、使用痕が認められないのは、このあたりに原因があるのであろう。

67～81は石核である。いずれも小形の原石であったと思われ、表皮を残すものが多い。68、69、73、74、75、76、77は、その２面あるいは３面に表皮が残っている。

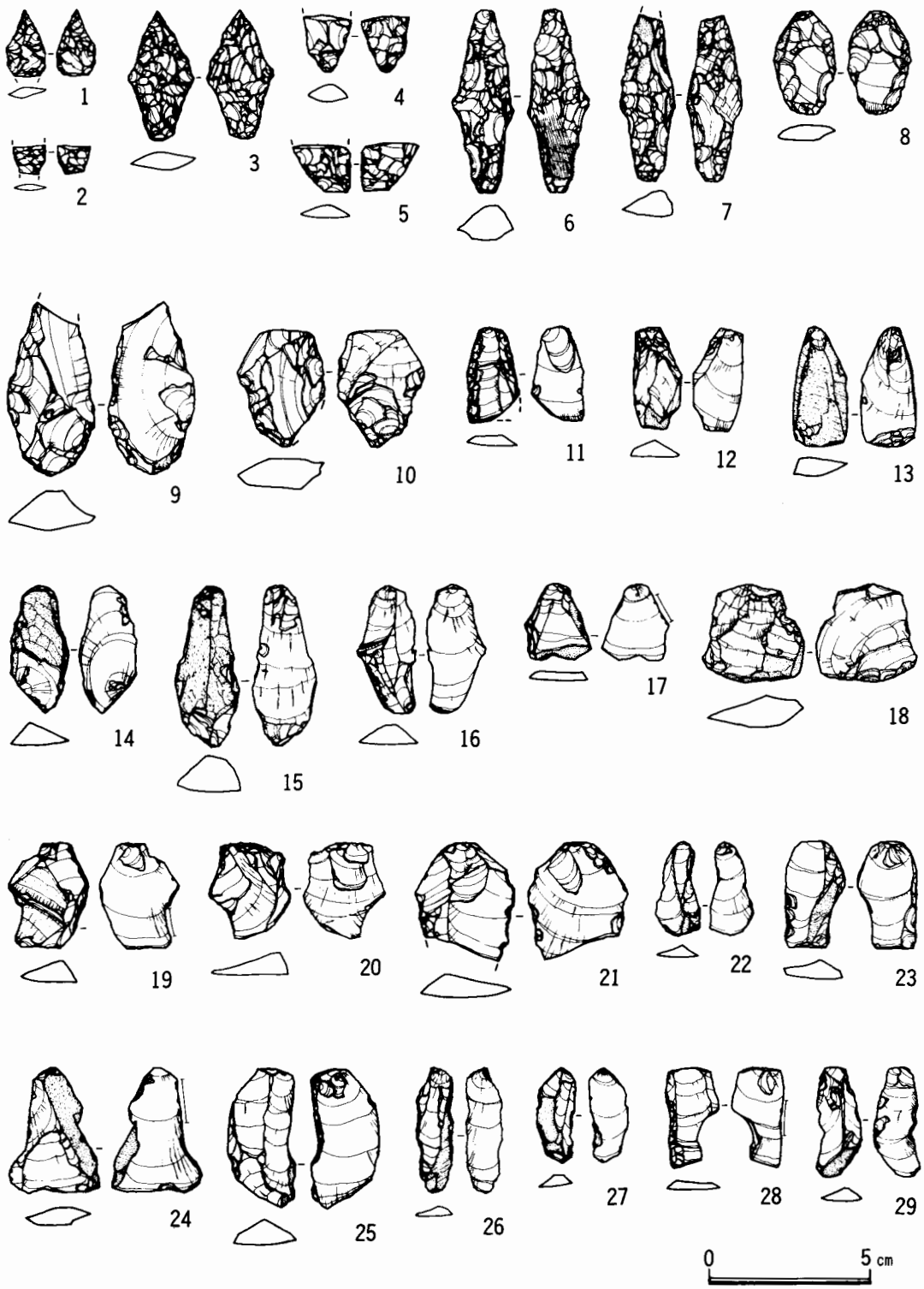
82は、石斧の刃部を欠失したものである。83は、瑪瑙質の自然石である。形態から見て垂玉として使用されたものかとも思われる。84は、４面ともに非常によく使いこまれている砥石である。土



第８図　発掘区遺物出土数


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
10cm

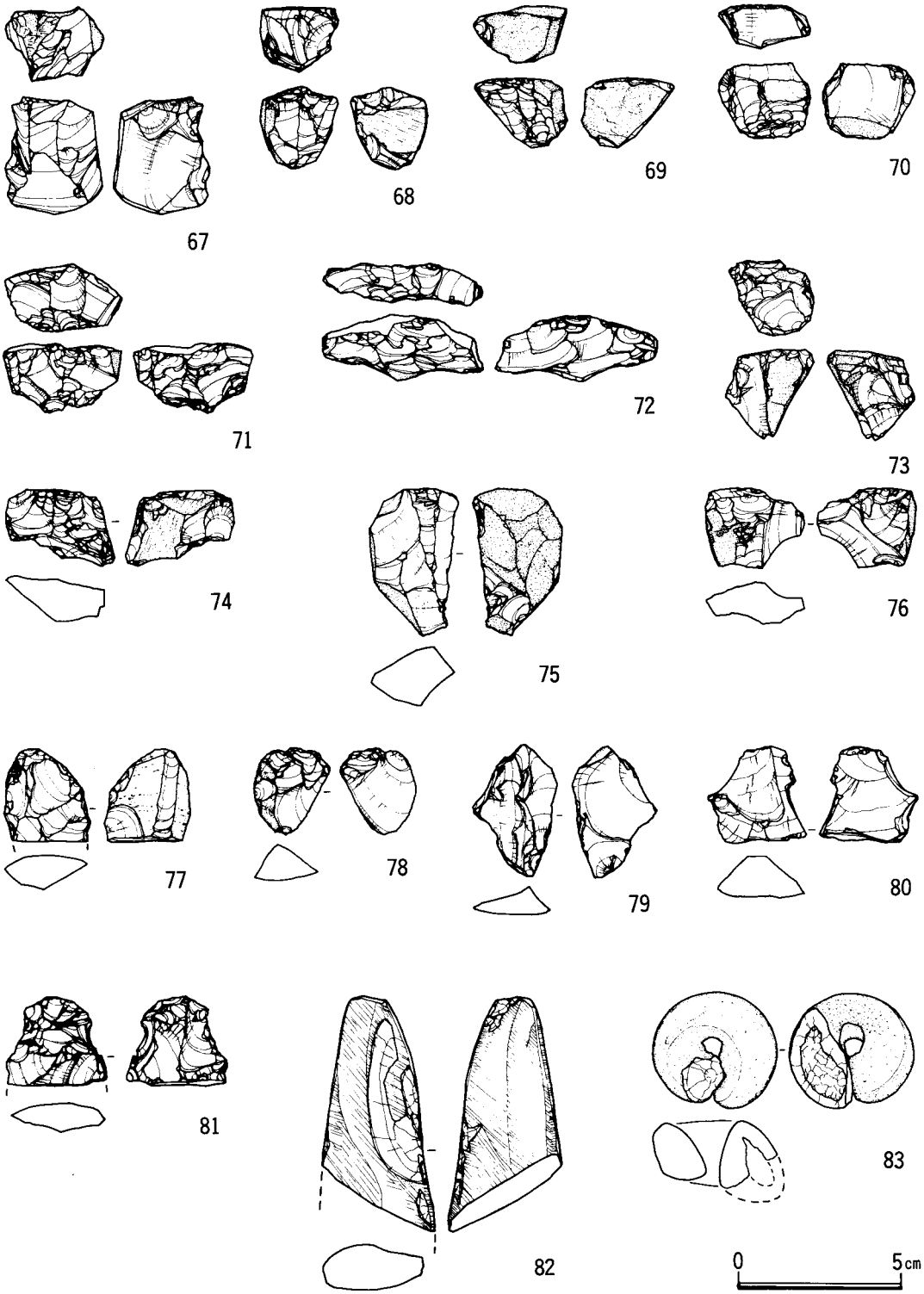
第９図　土器拓影図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
5 cm

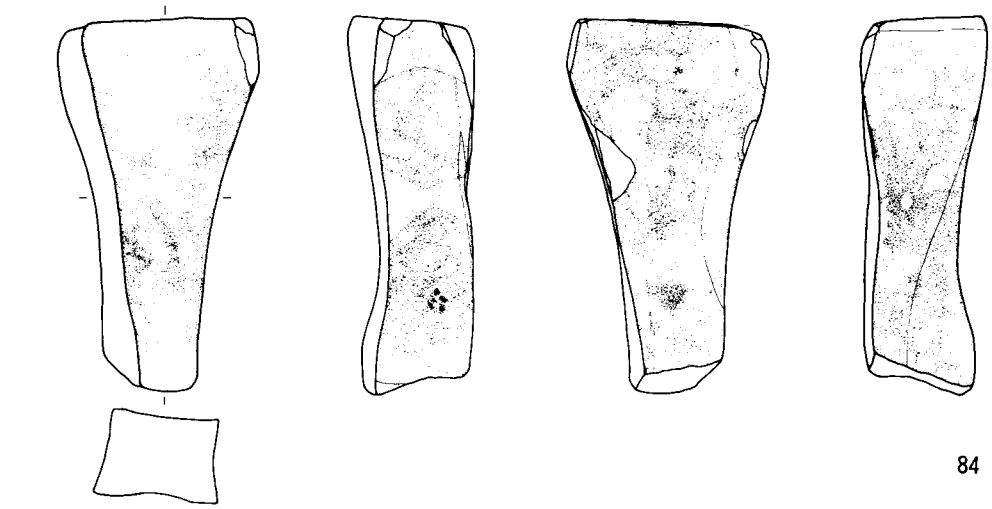
第10図　石器実測図(1)

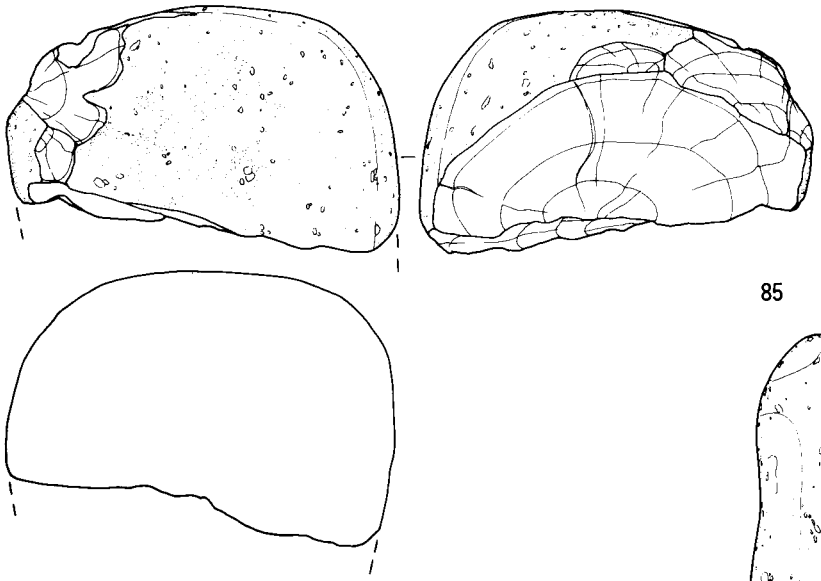
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
0
5cm

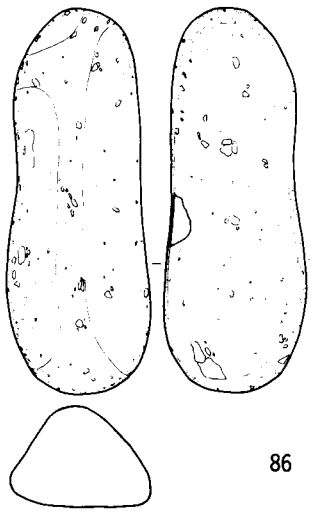
第11図　石器実測図(2)



第12図　石器実測図(3)







0 10 cm

第13図　石器実測図(4)

器、石器、剝片などが比較的集中して発見された発掘区の隣Ｂ－９区から出土した。４面ともに軽く湾曲した砥面をもち、更に長軸中央部が使用により極端に細くなり、この部分から２つに切断している。その後、広い砥面は切断後も使用されたと思われる。85は、Ｅ－８区から出土した台石と思われるものの破損品である。約３分の１程が現存し、一部にわずかながら、使用によると思われる自然面の目つぶれの痕が見られる。Ｅ－８区は、多量の剝片、細片が出土していることから、これらの作業に関連して使用されたと思われる。86は、断面３角形の棒状の礫である。肉眼的な観察によれば、特に顕著な使用痕を認めることができないが、このあたり一帯には自然礫が認められないことから、目的を持って持ち込まれたものと思われる。

第6章　結　語

本遺跡から出土した土器は、口縁部および胴部に見られる縄文を施文した横走貼付帯と、器面に対しほぼ直角に行われる外側からの刺突文、貼付帯施文前につけられる羽状縄文によって特徴とされる。現在までのところ市内では、このような土器が出土する遺跡は、あまり多くは知られていない。本遺跡の周辺では、Ｓ242遺跡から復元完形土器１個と破片が少量出土している。市内全体を見ても西区前田Ｎ309遺跡（上野・羽賀他1973、上野・高橋他1975）、白石区白石神社遺跡（加藤・上野他1973）などで断片的な出土が知られるのみである。これらの土器は、古くは余市町大谷地貝塚（五十嵐1934）により初めて紹介され、その後余市式の名称を冠して呼ばれるようになった土器群に比定できる。昭和45年当別町伊達山遺跡（岩崎・三室他1970）の発掘により出土した資料により伊達山式土器と呼ばれ、縄文時代中期末に編年されてきた土器である。近年では後期初頭に位置づける考え（大沼1981）も示されている。本遺跡においては、非常に断片的な土器が発見されたのみであり、この土器にかかわる問題を解決する手がかりとなるような事実は、全く発見できなかった。

石器群は、黒曜石製の石器、剝片が主体であり、その多くは原石面の表皮が残されていることから、小形の原石から製作されたものと考えられる。定形的な石器としては、石鏃、石槍またはナイフ状石器とでもいうべき形態のものが見られるのみである。他の刃器の多くは、剝片の周縁や一部に調整を加えたもの、あるいは使用痕状の細かい剝離の見られるものが多く、この時期の石器群とほぼ同様なあり方を示している。

本遺跡の総合的な特徴は、①住居跡、焼土などの遺跡が全く発見されない。②発見された土器の量が極めて少量である。③定形化された石器と礫石器が少ない。④黒曜石製剝片石器の量に対してフレーク・チップが多量に集中的に発見されるなどが挙げられる。

遺跡のなかにおける遺物の出土状態では、①製品として完成され、しかも使用された石器、石核、大形の剝片、砥石、土器片などが発見されるＣ－５、６、７区、Ｂ－７、８、９、10区などの屋根筋の地区と、②約10,000点を数えるフレーク・チップの集中と、台石破片１点、石鏃破片３点、使用痕のある剝片多数が発見される西側斜面のＥ－８、10区がある。そして、前者には、完成されしかも使用された石器、石核、土器などが見られ、明らかに生活を感じさせるのに対し、後者では、チップを主とする黒曜石片、製品の破損品、使用により側縁が磨消した剝片など、日々の生活からやや離れた状態を呈する。即ち、後者は、屋根筋の場で行われた石器製作により生じた石屑とこれに伴う道具の作成のさいに使用された剝片を廃棄した地域と見ることができよう。

本遺跡周辺の小野津幌川と野津幌川にはさまれる台地の遺跡については、第３章で述べたとおりである。ここで野津幌川の西側の地区にまで目を広げ、中期の遺跡について概観して見たい。この地区で竪穴住居跡の発見される遺跡のほとんどが、いわゆる「トコロ６類土器」に属する。Ｓ153

遺跡１軒、Ｓ267、Ｓ268遺跡（羽賀、内山1979）２軒、Ｓ255遺跡（羽賀1979）４軒、Ｓ265遺跡（上野、内山、1977）１軒（この他に時期不詳住居跡２軒あり）などが見られるのみである。そして、これらの遺跡とても、遺物出土の総量から見て、長く生活の拠点となっていたと考えられない。更に、この他の遺構の見られる例でもＳ153遺跡から発見された墓拡群を除くと、いわゆるＴピットと呼ばれる溝状遺構が発見される遺跡が圧倒的多数をしめている。

以上のように、野幌丘陵の小野津幌川西部から月寒台地に至る間に、同一時期内でも長期間にわたって居住したと思われる遺跡や、各時代に及ぶ複合遺跡がほとんど見られないことは、この地域一帯に見られる支笏軽石流堆積物の存在と、無縁ではありえないと思われる。この堆積物は、周知のように水による侵食に弱く安定が悪く、至るところに小谷を形成し、土地が乾燥し地味も極めて貧しく、植物の生育に不適である。このような土地では、狩猟、採集民としての縄文人の生活を支えるに十分な植物食料を供給することが不可能であったと思われる。しかし、その反面、このような場所は森林とはなり得ず、疎林を形成するものと思われる。そのために鹿などの捕獲には適した場所であったと思われ、Ｔピットと呼ばれる陥し穴が発見される多くの遺跡が見られる。

以上、概観したこのあたり一帯の遺跡のあり方からすれば、本遺跡の性格は狩猟のための前進基地であると見ることができよう。そして、この基地内では、小形の原石も運び込まれ、狩猟に必要とする石器の補充製作と道具の加工も同時に行われていたと推測することが可能である。現在までの調査状況では、このような前進基地を設けた彼らの拠点集落が、どのあたりに営まれていたか特定することが不可能である。ただ、この地域の大雑把な遺跡の捉え方からすれば、小野津幌川から月寒台地に至る地域には存在しなかったということができよう。あくまでも推測にすぎないが、野幌丘陵の東部の江別市域か、あるいは、札幌市域の月寒台地に求めることが妥当と思われる。

以上、縄文時代中期における野幌丘陵西部域の利用形態について、極めて大きくその方向性のみについて示したが、各時代におけるこの地域の利用、トコロ６類土器に至ってなぜ急に竪穴住居跡を有する遺跡が増加するかなど不明な点が数多く見られるが、今後更に発掘調査が進み、資料が増加するに伴い各遺跡及び遺跡間の詳細な比較検討をとおして、より総合的な利用形態を明らかにすることが可能となろう。

〔参考文献〕

赤松守雄・山田悟郎他　1981　「野幌丘陵の地質と古生物の変遷」　『野幌丘陵とその周辺の自然と歴史』
北海道開拓記念館研究報告　第６号

五十嵐鉄　1934　『大谷地貝塚の層位学的研究』

岩崎隆人・三室俊昭他　1970　『伊達山遺跡』

上野秀一・羽賀憲二他　1974　『Ｎ309遺跡』　札幌市文化財調査報告書Ⅵ

上野秀一・高橋和樹他　1975　『Ｎ309遺跡　1976年度発掘調査』　札幌市文化財調査報告書ⅩⅡ

上野秀一・内山真澄　1977　『Ｓ265遺跡』　札幌市文化財調査報告書ⅩⅤ

上野秀一・羽賀憲二他　1982　『Ｓ153遺跡』　札幌市文化財調査報告書ⅩⅩⅣ

大沼忠春　1981　「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」
考古学雑誌　第66巻４号

加藤邦雄・上野秀一他　1973　『白石神社遺跡』　札幌市文化財調査報告書Ⅰ

加藤邦雄・上野秀一　1976　『Ｓ153遺跡』　札幌市文化財調査報告書Ⅹ

直井孝一　1975　『KONOPPORO』

羽賀憲二　1976　「道央部における縄文時代早期平底土器群の様相について－札幌市Ｓ237遺跡発掘報告を
中心として」　北海道考古学　第12輯

羽賀憲二・内山真澄他　1977　『Ｓ267、Ｓ268遺跡』　札幌市文化財調査室報告書ⅩⅣ

羽賀憲二　1979　『Ｓ255遺跡』　札幌市文化財調査報告書ⅩⅨ

松岡達郎　1976　『札幌市小野幌・下野幌地区における埋蔵文化財分布調査について（1975年度）』

第1表　石器一覧表

挿図番号	図版番号	出土地区	器種名	規格 長さcm	規格 幅 cm	規格 厚さcm	重量 g	石質	備考
10— 1	8		石鏃	2.05	1.22	0.36	0.6	Obs.	試掘
2		E—8	石鏃	(0.91)	1.03	0.23	(0.2)	Obs.	
3		B—8	石錐先	4.04	2.00	0.69	3.8	Obs.	
4		E—8	石錐先	(1.76)	1.50	0.55	(1.2)	Obs.	
5		E—8	石錐先	(1.67)	1.83	0.42	(1.0)	Obs.	
6		B—9	石槍	5.70	1.96	1.08	8.0	Obs.	
7		B—9	石槍	(5.20)	1.77	0.87	(6.0)	Obs.	
8		不明	削器	3.22	1.90	0.82	4.4	Obs.	
9			削器	(5.37)	2.66	1.30	(14.8)	Obs.	試掘
10		B—7	削器	(3.65)	2.52	0.98	(9.0)	Obs.	
11		B—2	削器	2.96	(1.73)	0.30	(1.9)	Obs.	
12		C—2	剥片	3.21	1.52	0.70	3.1	Obs.	
13		C—7	使用痕のある剥片	3.77	1.72	1.06	5.3	Obs.	
14		C—6	使用痕のある剥片	3.97	1.82	0.70	3.7	Obs.	
15		E—4	使用痕のある剥片	5.00	2.03	1.16	10.8	Obs.	
16		C—6	使用痕のある剥片	3.95	1.80	0.79	0.4	Obs.	
17		E—8	使用痕のある剥片	2.42	2.01	0.50	1.6	Obs.	
18		C—6	使用痕のある剥片	3.12	3.10	1.02	9.1	Obs.	
19		E—8	使用痕のある剥片	3.46	2.48	1.08	6.5	Obs.	
20		E—8	使用痕のある剥片	3.03	2.52	0.76	4.0	Obs.	
21		E—8	使用痕のある剥片	(3.70)	3.08	0.75	(7.2)	Obs.	
22		B—5	使用痕のある剥片	2.90	1.36	0.60	1.2	Obs.	
23		E—1	使用痕のある剥片	(3.34)	1.88	0.95	(4.4)	Obs.	
24		C—8	使用痕のある剥片	3.90	2.80	0.69	5.0	Obs.	
25		A—6	使用痕のある剥片	4.15	2.31	0.82	6.3	Obs.	
26		E—8	使用痕のある剥片	3.86	1.15	0.54	1.6	Obs.	
27		C—5	使用痕のある剥片	2.92	1.20	0.68	1.6	Obs.	
28		E—8	使用痕のある剥片	3.10	1.67	0.38	1.7	Obs.	
29		B—7	使用痕のある剥片	3.43	1.47	0.70	1.8	Obs.	
11—30		C—7	使用痕のある剥片	3.88	1.27	0.10	3.2	Obs.	
31		不明	使用痕のある剥片	2.80	1.17	0.30	0.7	Obs.	
32		E—8	使用痕のある剥片	2.84	1.36	0.48	1.0	Obs.	
33		E—8	使用痕のある剥片	3.09	1.20	0.90	1.9	Obs.	
34		E—8	使用痕のある剥片	2.70	1.50	1.53	1.2	Obs.	
35		C—2	使用痕のある剥片	2.23	0.84	0.45	0.5	Obs.	
36			使用痕のある剥片	2.25	1.40	0.58	1.2	Obs.	試掘
37		E—8	使用痕のある剥片	1.87	1.05	0.44	0.5	Obs.	
38		E—8	使用痕のある剥片	1.97	1.50	0.50	1.0	Obs.	
39		E—8	使用痕のある剥片	1.94	1.90	0.32	0.9	Obs.	

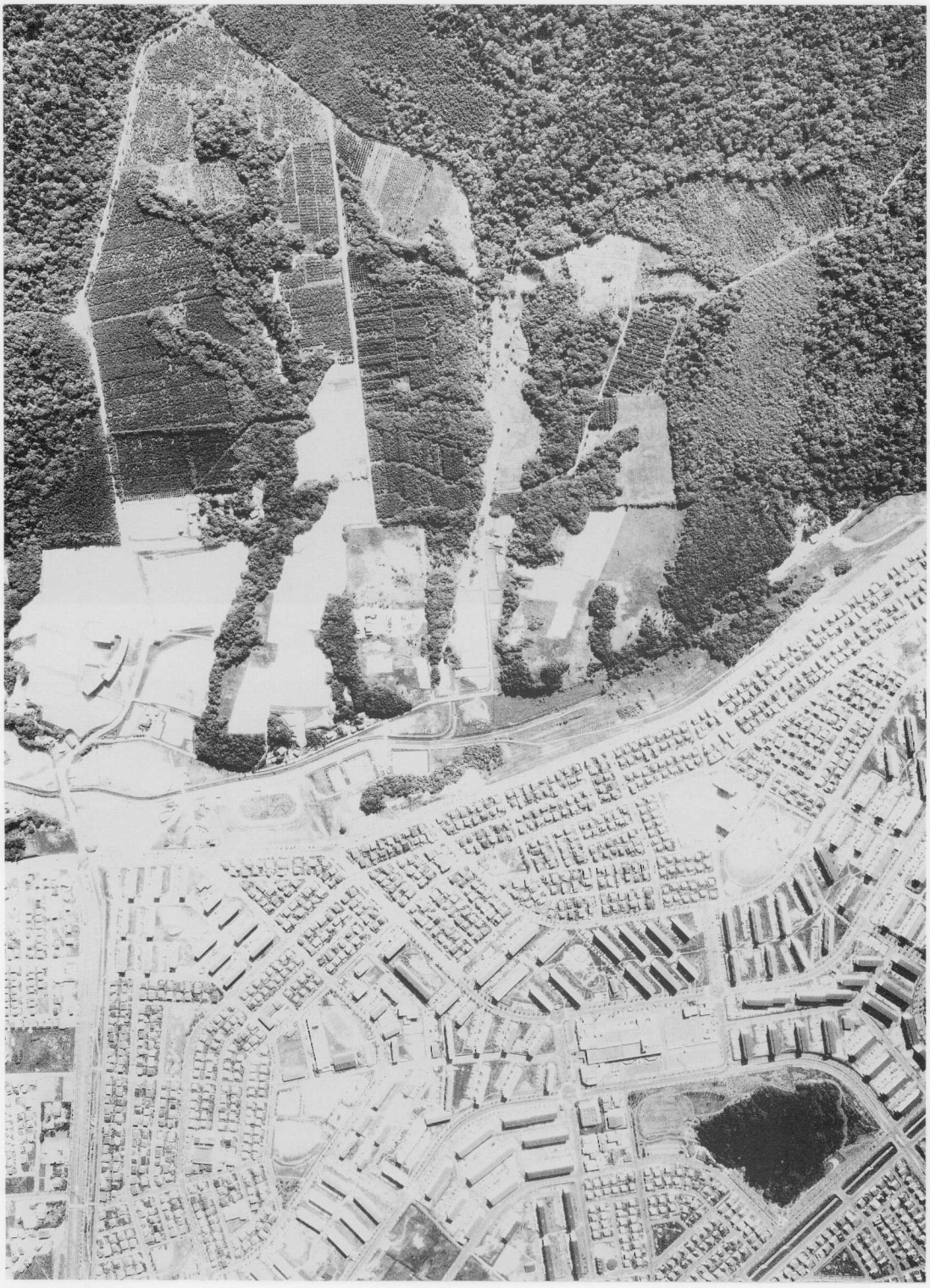
挿図番号	図版番号	出土地区	器種名	規格 長さcm	規格 幅 cm	規格 厚さcm	重量 g	石質	備考
11—40	8	E—8	使用痕のある剝片	1.90	2.02	0.30	0.8	Obs.	
41		E—8	使用痕のある剝片	1.92	1.64	0.40	1.0	Obs.	
42			使用痕のある剝片	2.70	2.79	0.58	2.4	Obs.	表採
43		E—8	使用痕のある剝片	2.35	2.26	1.05	3.2	Obs.	
44		E—8	使用痕のある剝片	2.29	1.87	0.90	3.0	Obs.	
45		C—7	使用痕のある剝片	3.07	2.15	1.33	7.0	Obs.	
46		B—4	使用痕のある剝片	3.78	2.04	1.42	7.3	Obs.	
47		C—7	剝片	3.46	2.10	0.40	2.5	Obs.	
48		C—6	剝片	4.00	3.85	1.16	12.4	Obs.	
49		A—1	剝片	4.03	1.39	0.82	2.2	Obs.	
50		C—6	剝片	3.75	1.29	0.50	1.4	Obs.	
51		E—1	剝片	3.77	1.93	1.10	2.6	Obs.	
52		B—4	剝片	2.82	1.53	0.66	2.2	Obs.	
53			使用痕のある剝片	2.86	1.67	0.65	2.0	Obs.	試掘
54		B—9	剝片	3.45	1.80	0.87	3.8	Obs.	
55		D—9	剝片	3.34	1.55	0.56	2.7	Obs.	
56		不明	剝片	(2.70)	1.63	0.68	(2.4)	Obs.	
57		A—6	剝片	(2.84)	1.52	0.40	(1.3)	Obs.	
58		不明	剝片	3.26	2.14	0.46	2.4	Obs.	
59		B—5	剝片	4.14	1.80	0.76	5.0	Obs.	
60		B—5	剝片	(2.40)	1.38	0.60	(1.6)	Obs.	
61		C—6	剝片	3.10	1.70	1.00	4.1	Obs.	
62		E—8	剝片	2.45	2.09	0.52	1.8	Obs.	
63		B—9	剝片	2.46	2.03	0.70	2.8	Obs.	
64			剝片	2.26	2.40	0.74	2.7	Obs.	試掘
65		A—1	剝片	2.87	2.91	0.60	3.8	Obs.	
66		E—8	剝片	2.00	3.44	0.50	2.2	Obs.	
12—67	9	B—9	石核	3.80	3.00	2.36	23.6	Obs.	
68		D—6	石核	2.58	2.55	2.24	12.6	Obs.	
69			石核	2.80	2.59	1.57	9.0	Obs.	表採
70			石核	2.36	2.91	1.39	9.3	Obs.	試掘
71		D—4	石核	2.22	3.65	2.19	13.2	Obs.	
72		C—7	石核	2.03	5.00	1.25	9.4	Obs.	
73		E—1	石核	3.10	2.60	2.05	11.2	Obs.	
74		B—7	石核	2.46	3.57	1.40	9.6	Obs.	
75		C—5	石核	4.65	2.75	1.80	20.6	Obs.	
76		D—9	石核	2.53	3.10	1.29	8.4	Obs.	
77		B—9	石核	3.13	2.66	1.14	8.3	Obs.	
78		C—6	石核	2.63	2.55	1.16	5.2	Obs.	
79		E—8	石核	4.10	2.60	1.50	8.0	Obs.	

挿図番号	図版番号	出土地区	器種名	規格			重量	石質	備考
				長さcm	幅 cm	厚さcm	g		
12—80	9		石核	2.95	3.04	1.37	8.2	Obs.	試掘
81		B—7	石核	(2.73)	3.18	1.05	(7.8)	Obs.	
82		B—9	石斧	(7.45)	3.76	1.50	(45.6)	Mu.	
83		A—3		3.60	3.90	2.20	29.0	Ag.	垂玉か？
13—84	10	B—10	砥石	15.00	7.30	5.10	550.0	Sa.	
85		E—8	台石	(9.70)	15.80	(10.90)	(1,760.0)	And.	
86		A—9	棒状礫	15.40	5.80	4.20	460.0	And.	敲石か？

And. (Andisite)：安山岩　Ag. (Agate)：瑪瑙　Mu. (Mudstone)：泥岩
Obs. (Obsidian)：黒曜石　Sa. (Sandstone)：砂岩

図　　版

図版1



遺跡空中写真

図版2

A遺跡遠景（北から）

B遺跡遠景（西から）

A遺跡近影（南東から）

B遺跡近影（南東から）

図版4

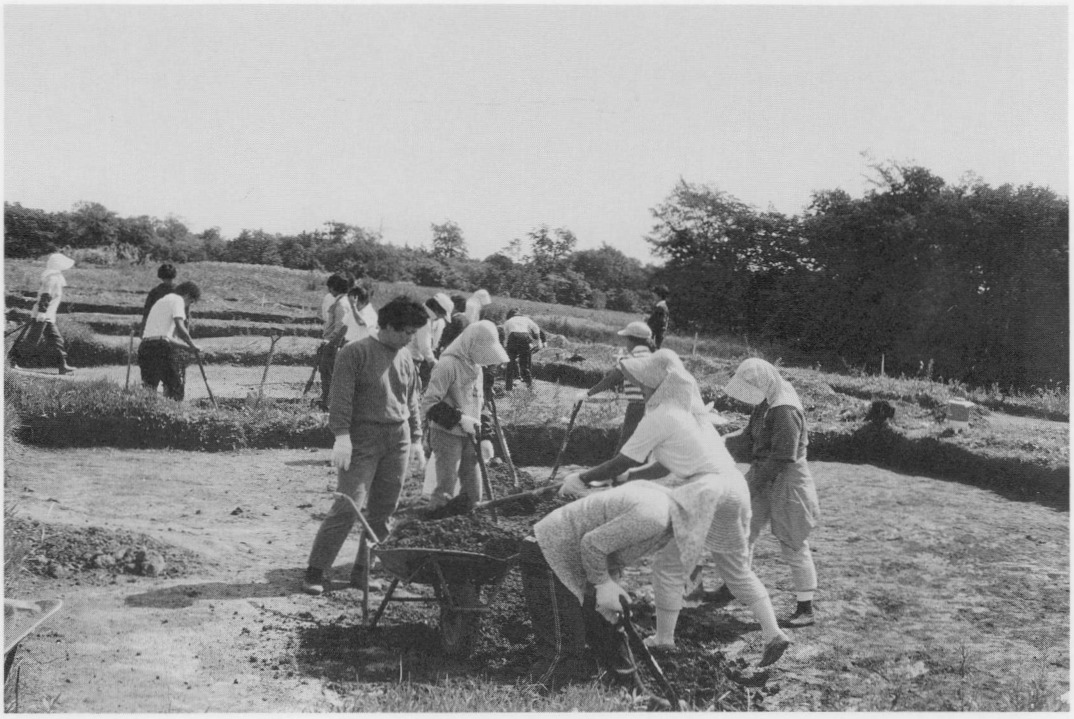
A発掘状況

B発掘状況

A発掘区トレンチ

B発掘状況

図版6



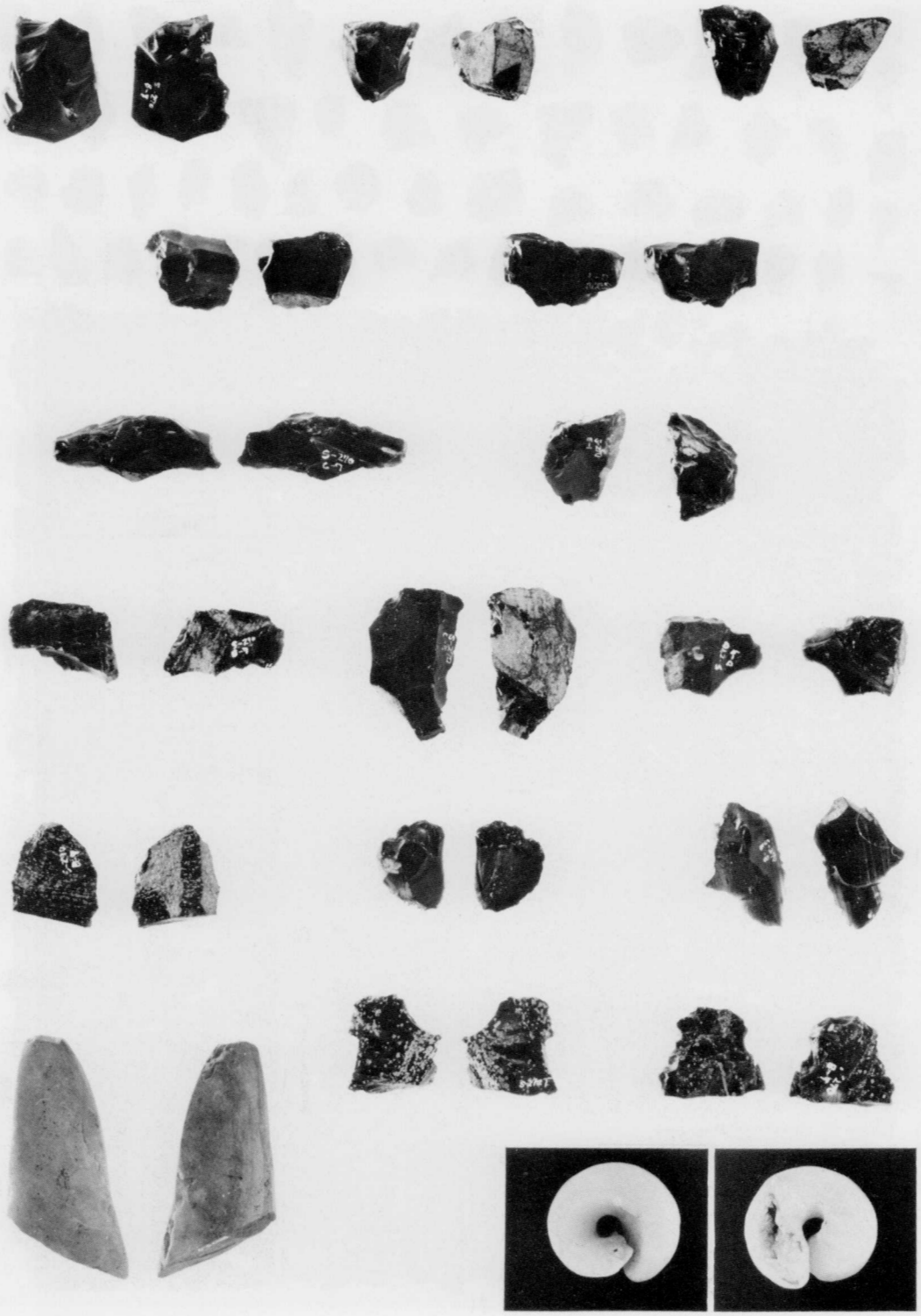
A発掘状況

B発掘状況

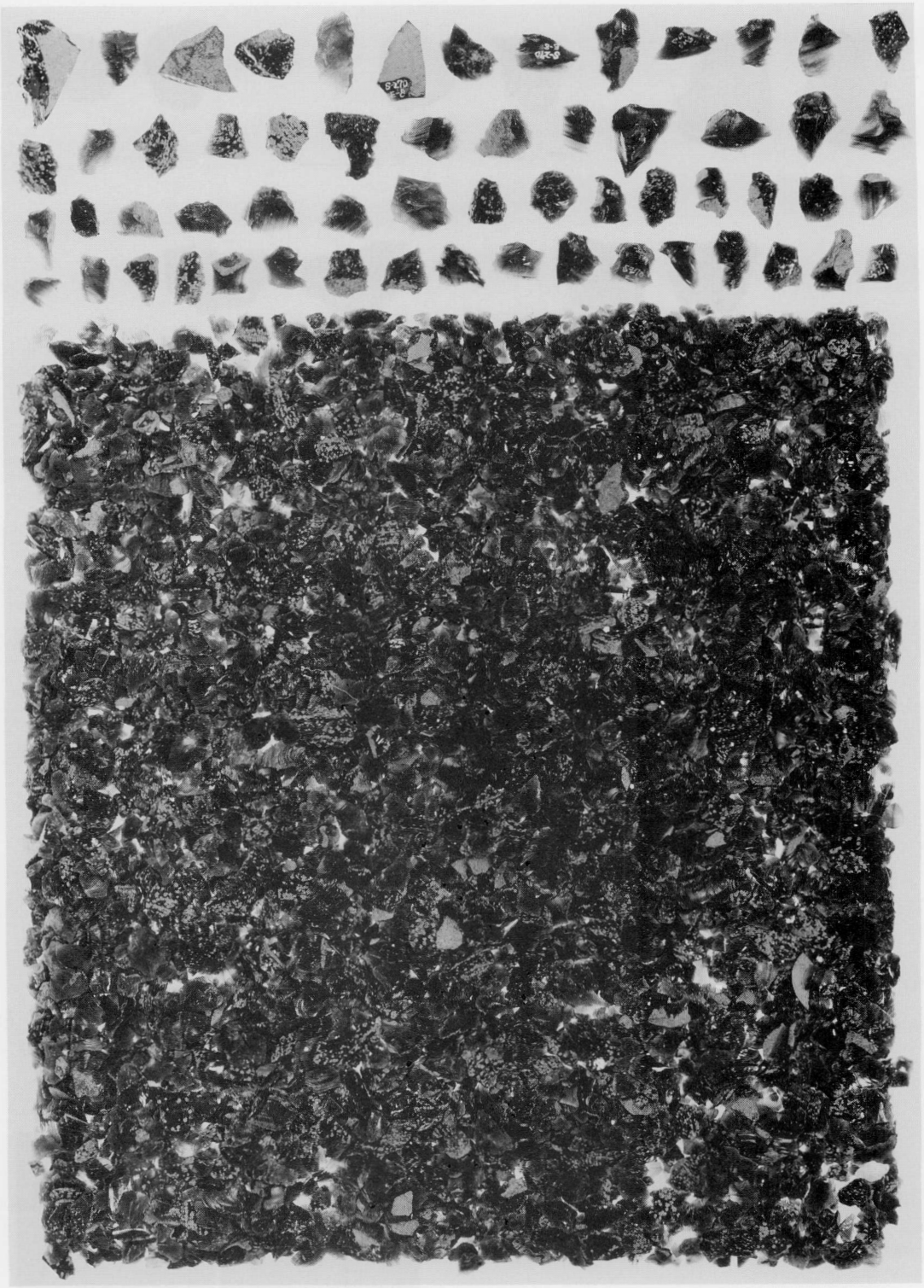
出土土器

図版8

出土石器・フレーク



出土石器



E－8区出土フレーク・チップ

出土石器

札幌市文化財調査報告書 XXXI

S 270 遺跡

昭和62年 3 月20日　印刷
昭和62年 3 月25日　発行

発行者　札 幌 市 教 育 委 員 会
060 札幌市中央区南 1 条西14丁目
印刷所　富士プリント株式会社
064 札幌市中央区南16条西 9 丁目